

京都大学教育研究振興財団助成事業
成果報告書

平成25年 8月28日

公益財団法人京都大学教育研究振興財団

会長 辻 井 昭 雄 様

所属部局・研究科 文学研究科美学美術史学専修

職名・学年 修士2年生

氏名 浅井 佑 太

助成の種類	平成 25 年度 ・ 若手研究者在外研究支援 ・ 国際研究集会発表助成		
研究集会名	19th International Congress of Aesthetics		
発表題目	Schoenberg's Transformation of Musical Language from the Perspective of Beethoven		
開催場所	ポーランド・Krakow・Jagiellonian University		
渡航期間	平成25年 7月21日 ～ 平成25年 7月29日		
成果の概要	タイトルは「成果の概要／報告者名」として、A4版2000字程度・和文で作成し、添付して下さい。「成果の概要」以外に添付する資料 <input checked="" type="checkbox"/> 無 <input type="checkbox"/> 有()		
会計報告	交付を受けた助成金額	200,000円	
	使用した助成金額	200,000円	
	返納すべき助成金額	0円	
	助成金の使途内訳	航空運賃	141,500円
		学会参加費	12,000円
宿泊費		46,500円	
当財団の助成について	(今回の助成に対する感想、今後の助成に望むこと等お書き下さい。助成事業の参考にさせていただきます。) 若手研究者にとって、国際学会で発表することは金銭的な面で非常に厳しいと感じています。今回のように助成金をいただけることは願ってもない機会であり、大変ありがたかったです。このような助成金が今後も継続されれば、非常にありがたいです。		

成 果 の 概 要

文学研究科 美学美術史学専攻
修士課程2年生 浅井佑太

1. 学会概要

報告者は国際研究集会派遣助成を利用して2013年7月21日から27日までの7日間ポーランド・クラクフで開催された第十九回国際美学会に参加した。国際美学会は芸術学や美学といった多岐にわたる範囲の専門家が集うものであり、申請者が専門とする音楽学の分野からも多くの専門家が参加している。

2. 発表の概要

オーストリアの作曲家アーノルト・シェーンベルクは、1920年代から、十二音技法と呼ばれる独自の作曲技法を導入しはじめた。この作曲技法によって彼は、それまでの伝統的な音楽を支えてきた調的語法を捨て去るとともに、第二次大戦後の現代音楽に対して決定的な影響を与えることとなったとされている。報告者の発表では、シェーンベルクが十二音技法を導入するにいたるまでの発展を主に、楽曲分析的な側面から解明し、それを同時代全体の音楽的変遷の中に位置づけることを試みた。

報告者はまず、第一次世界大戦以降におけるドイツ・オーストリアの作曲家の音楽美学上の変化を考察するとともに、彼らの間で、表現主義的な作曲スタイルに対して否定的な見解が支配的となっていく過程について述べた。そしてこうした文脈の中に、シェーンベルクの作曲技法上の発展をどのように位置づけるために、彼の音楽の分析を試みた。

そして最終的に、1920年代以降シェーンベルクの音楽では表現主義的な側面は次第に後退して行き、十二音技法の導入後による楽曲ではほとんどの場合確認することができないことを明らかにした。具体的に指摘するならば、とりわけ弦楽四重奏第三番 op.30 で顕著なように、表現主義時代に典型的に見られた突発的な音楽的緊張の創出は避けられる傾向にある。このことはシェーンベルクの音楽美学上の変化からも具体的に裏付けられる。また同時にこの時期、シェーンベルクの中では、ベートーヴェンの重要性は失われつつあったのである。

3. 学会発表の成果

(1) 自身の発表に対する評価と助言

今回の報告者の発表では音楽学関係者が集い、また司会者は作曲家でもある Teresa Malecka 氏であった。報告者はとりわけ Malecka 氏から楽曲分析上における様々な指摘をいただくことができた。彼女の指摘は多岐にわたるが、報告者の方向性や分析内容に関しては概

ね好意的な評価を得ることができた。問題となるのは、むしろこうした分析と表現主義との関連をどのように裏付けるかであると思われる。シェーンベルクと表現主義との関係については、全体としては研究が進んでいるにもかかわらず、それを具体的な楽曲分析のレベルに落とし込むような研究が欠落している。こうした研究を進めるに際して、Malecka 氏からは、シェーンベルクの舞台作品などと器楽作品との関連性を研究してはどうか、という提案を受けた。Malecka 氏の提案は報告者が見落としていた側面を補うと同時に、こうした研究に奥行きを与えてくれるものであり、報告者の今後の研究におおいに生かされるであろうと考えている。

(2) 海外の研究

今回の国際美学学会では音楽学に限らず、広いジャンルの芸術学に関する発表・シンポジウムが数多く行われた。こうした研究発表は必ずしも、報告者の研究と直接的な関わりがあるわけではないが、極めて興味深いものばかりであった。とりわけ20世紀初頭のドイツ美術に関する発表では、申請者の研究と関わる面もあり大変参考になった。発表の場での質疑応答でも、この時期の表現主義的運動の動向に関していくつかの質問に応じていただき今後の研究の糧となるように感じられた。

(3) 海外の研究者との交流

国際美学学会ではセッションの間に会食が開かれ、その場で多くの外国人研究者と知り合うことができた。中でもイタリア人の研究者である Enea Bianchi 氏とは、彼が日本国内の芸術動向に強い関心を持っていることもあり、現在でも連絡を取り合っている。今回の学会では残念ながら、ドイツ・オーストリアで活動する音楽学関係者と個人的な繋がりをつくることはできなかったが、こうした人脈関係は報告者の今後の研究においても国際的な視野を与えてくれるものであると考えている。